写真提供／吉田一郎様・湖北町役場

▲田の神迎え／昭和59年・余呉町
無事収穫が迎えられるようにと祈る、農神迎えの儀式。

▲粥占い／昭和53年・湖北町
粥を用いて豊凶を占う祭事。

▲オコナイ／余呉町
五穀豊穣や豊漁を祈願した祭事。地域により内容が異なる。

▲サビラキ／昭和49年・余呉町
田植え始めの祭事。

▲ハゲ／昭和53年・長浜市
一年の農作業の半分を終え、稲の無事な生育を願う行事。

▲虫送り
稲の害虫を追い払う火祭。

▲郷回り／昭和55年・木之本町
台風や病害虫から逃れて、豊作を願う農耕儀礼。

▲八朔祭（青物神輿）／湖北町
農産物の豊作を願う行事。

▲太鼓踊り
雨乞い踊りと返礼踊りで構成されていることが多い。

▲放生会（ほうじょうえ）／湖北町
総ての生き物が生き延びていく事を願う祭。

1月

小寒／しょうかん（1月5日頃）
寒さが最も厳しくなる前の時期。この日を「寒の入り」という。寒中見舞いを出し始める。

大寒／だいかん（1月20日頃）
寒さが最も厳しくなる頃で、武道ではこのころ寒稽古が行われる。この頃から徐々に温度は上がり、春が目前となってくる。

2月

立春／りっしゅん（2月4日頃）
寒もようやく明け、気温が上昇し春の気配が感じられる日。木々の芽が次第に吹き始める。

雨水／うすい（2月19日頃）
雪が雨に変わり、柔らかな日差しで雪や氷が融け始め、春の気配が感じられる。農耕の準備を始める。

3月

啓蟄／けいちつ（3月5日頃）
大地が暖まり冬眠をしていた虫が穴から出てくる頃。柳の若芽が芽吹き、フキノトウの花が咲く。

春分／しゅんぶん（3月21日頃）
昼と夜の時間が同じ長さになる日。この日の前後7日が彼岸。

▲田はね／昭和45年・長浜市
鍬で掘り起こし、畦を埋める。

4月

清明／せいめい（4月5日頃）
清明とは、春先の清らかで生き生きした様子のこと。お花見シーズンであり、衣替えの頃。

穀雨／こくう（4月20日頃）
穀物の成長を助ける雨を穀雨と呼ぶ。柔らかな雨が田畑を潤すので、種蒔きの好期である。

5月

立夏／りっか（5月6日頃）
野山は新緑が目立ち始め、たけのこが生え出し、田では蛙が鳴き始め、夏の気配が感じられる。

小満／しょうまん（5月21日頃）
万物が次第に成長して、一定の大きさに達して来る頃。田に苗を植える準備を始める。麦畑が緑黄色に色づき始め、はしり梅雨が現れる。

▲田植え／昭和53年頃・余呉町

6月

芒種／ぼうしゅ（6月6日頃）
芒（のぎ：イネ科の植物にあるとげのような突起）を持った植物の種をまく頃。梅雨入りの頃で、昔は田植えの準備に追われた。

夏至／げし（6月21日頃）
昼間が最も長くなる日。昔は田植えで最も忙しい時期。

7月

小暑／しょうしょ（7月7日頃）
梅雨明けが近づくが集中豪雨も多く、暑さが本格的になり、セミが鳴き始める頃。小暑の終わりごろに夏の土用に入る。

大暑／たいしょ（7月23日頃）
一年中で最も気温が高い頃。小暑あるいは大暑から立秋までの間が暑中で、暑中見舞いはこの期間内に送る。

▲堰（せき）たて／昭和51年・長浜市
川の水を堰き止め、井堰をつくる。

8月

立秋／りっしゅう（8月7日頃）
僅かに秋の気配がするも、実際には残暑が厳しく一年で最も暑く感じる時期。この日から暑中見舞いではなく残暑見舞いを出すことになる。

処暑／しょしょ（8月23日頃）
暑さも峠を越し、穀物が実り収穫も目前となる。二百十日（立春から数えた日数）は台風のシーズンとなる。

9月

白露／はくろ（9月8日頃）
大気が冷えてきて、露ができ始める頃。

秋分／しゅうぶん（9月23日頃）
春分と同様に、太陽が真東から昇って真西に沈み、昼と夜の長さがほぼ同じになる日。雷が鳴らなくなり、虫が地中に隠れる。

10月

寒露／かんろ（10月8日頃）
露が冷気によって凍りそうになる頃。雁などの冬鳥が渡ってきて、菊が咲き始め、コオロギなどが鳴き止む。五穀の収穫もたけなわで、農家は多忙を極める。

霜降／そうこう（10月23日頃）
露が冷気によって霜となって降り始める頃。カエデやツタが紅葉し始める。この日から立冬までの間に吹く寒い北風を木枯らしと呼ぶ。

▲稲架（はざ）がけ／昭和55年・余呉町
刈り取った稲を束にし天日に干す作業。

11月

立冬／りっとう（11月7日頃）
初めて冬の気配が現われてくる日。

小雪／しょうせつ（11月23日頃）
僅かながら雪が降り始める頃。

12月

大雪／たいせつ（12月7日頃）
雪が激しく降り始める頃。ブリなどの冬の魚の漁が盛んになり、熊が冬眠に入り、南天の実が赤く色付く。

冬至／とうじ（12月22日頃）
太陽の南中高度が最も低く、夜が最も長くなる日。この日に柚子湯に入り、小豆粥や南瓜を食べると、風邪をひかないと言われている。古くは年の始点とした。

現在、日本で使われている太陽暦は、明治5年（1872年）12月3日を、明治6年1月1日として始められた。

新暦
地球が太陽の周囲を一回りする時間を一年と定めた暦で、月の運行や満ち欠けなどは考慮されていない。世界の共通暦であるグレゴリオ暦。太陽暦。

旧暦
月の運行や満ち欠けによる周期的変化を基準とした太陰暦に、二十四節気など太陽暦の季節変化の要素を取り入れた暦。太陰太陽暦。

二十四節気（にじゅうしせっき）
太陰暦では、暦の日付と太陽の位置とは関係がなく、暦と季節にズレが生じる。そのため、季節を調すための工夫として考え出されたもので、1年を24等分し、その区切りに名前をつけたもの。

この誌面では、農作業の一年の流れを表したものを「農耕暦」としました。

地域の自然現象に合わせて決めた、湖北の農耕暦（のうこうれき）。

いつ何を植え、何を収穫するか…農耕暦の大筋は毎年ほぼ同じです。しかし、天候は年によって異なり、微調整が必要なのも事実。そのとき参考になるのが自然現象です。では、湖北にはどんな自然観察の知恵が伝わっているのでしょうか。湖北の暮らしに詳しい長浜市の吉田一郎さん、余呉町鷲見（わしみ）にお住まいだった谷口長三さん、余呉町上丹生の久保道雄さん・慶子さんご夫妻、そして余呉町下丹生の三國忠司さんにお話をうかがいました。

地域で大きく異なる湖北の自然環境

わが国では月の運行を基本にした旧暦（太陰太陽暦）が長年使われてきたため、農耕暦の基本は旧暦にありますが、湖北では自然現象でいつ何をどうするかを決めてきたのが主流だと吉田さんは言います。

「湖北と一口で言っても、地域によって自然環境が大きく異なるからです。例えば、上丹生などの山間地は他に比べて気温が低く日照時間も短いので、同じ作物でも栽培時期が異なります。同じ暦で農作業を決められず、平地の国友なら金糞山（かなくそやま）の残雪が馬蹄形（ばていけい）（馬のひづめの形）になれば種蒔き時とか、地域ごとの自然指標が生まれたのだと思います」（吉田さん）。

上丹生の久保さんも「農作業は水の温度次第。種籾（たねもみ）蒔きは普通3月25～26日頃から始まりますが、この辺は4月でも雪が降るほど寒いですから、早くても4月7～8日頃。田植えの時期になると山裾（やますそ）に桃色の花が一面に咲くので、それを田植えの目安にしています。私たちはその花を『田植え花』と呼んでいます。また、山蕪（やまかぶ）も鷲見では盆前に蒔きますが、ここでは9月中頃に蒔きますね」。

上丹生ではこのほか「サトイモ、キュウリ、カボチャ、ダイコンなど直蒔きするものは桜の花の開花時期に合わせるとうまくいく」「モモの花が咲くと地面に雪が残っていてもゼンマイやワラビが採れる」と言います。

「モモの花が咲いたらみんな山へ行きますし、カヤ（バイ）の実採りは秋の彼岸の日、ちょっと遅れて山へ行くと、もうありませんね」（久保さん）。

丹生の水の冷たさは農業に不利なようですが、それこそが丹生の米をおいしくしてくれていると三國さん。「おいしい米の産地はいずれもきれいな雪解け水があり、昼夜の温度差が大きいのが特長です。丹生の米は新潟県魚沼産にも負けない味で知られています」。

その年が豊作かどうかを占う指標を上丹生や下丹生では「コブシがたくさん咲くと豊作」、「ツクツクホウシがたくさん鳴くと豊作」などといいます。

今も旧暦が生きている例として上丹生の「八専（はっせん）（※）の日にダイコンを引いて干すと乾きが悪く、竹を切ると虫が入る」があります。この時期は湿度の高い温暖な日が多いためだとみられます。

また、秋のサンドマメは別名七夕マメと呼ばれ7月7日頃に蒔くとよいとされていますが、これは旧暦の話。「今の8月上旬に蒔くとたくさん採れます。農家でも間違って七夕の日に蒔いている人がいます」（久保さん）。

豪雪への恐れが生んだ自然観察の諸説

農耕だけでなく天候、特にその年の雪を占うための自然観察も多く伝わっています。

「鷲見では、晩秋の南東と北西の雲の動きを見てその冬の雪の多寡（たか）を占う『雲定め』をしました」（吉田さん）。「旧暦の10月20日の雲の形を見て占うのですが、どんな雲が大雪なのかは人によって違い、実にさまざまな説があります。この時期に出た雲はその冬中よく出るのは事実ですが…。また、冬場の南の雲で雪が降ると大雪になるとも言われていますね」（谷口さん）。上丹生では「茶の花がたくさん咲いた年は大雪」（久保さん）だそうです。

雪の多寡にまつわるものが人によって異なり多くの説となって伝わっているのは、それだけ地域の人たちが「豪雪」に備える知恵をもっていたと言えます。

合理的な理由がある農耕暦も

一方、地域の取り決めとしての農耕暦もあります。例えば、田植えの日を統一すること。苗が足りないとき互いに融通（ゆうずう）し合うための知恵です。その日を下丹生では「耳切り」（6月8日以降）、鷲見では「さいたて」（6月15日）、上丹生では「耳切り」、「さいたて」と呼びます（6月8日）。

また、田の肥料となる草を刈る日をそろえる取り決めもあり、これはよい草を誰かが独占しないためのもの。上丹生の区有地「にしがむね」と「おおぐち」では、それぞれ5月23日と28日からと定められていました。

このほか上丹生では、大豆を蒔く日（マメウエ・5月28日）をそろえています。蒔いたマメをハトやウサギに食べられないための工夫です。

栽培時期を特に選ばない品種が開発されるなど、農耕暦があまり使われなくなりましたが、そこに秘められた「自然と共に営む姿」は今も大切ではないでしょうか。

※暦で干支（えと）の十干（じっかん）と十二支（じゅうにし）の五行が合う日。年に6回あり、降雨が多いという。

［お話を伺った方々］

谷口 長三（たにぐち ちょうぞう）さん
余呉町東野在住

吉田 一郎（よしだ いちろう）さん
長浜市在住

三國 忠司（みくに ただし）さん
余呉町下丹生在住

久保道雄（くぼ みちお）さん・慶子（やすこ）さん

余呉町上丹生在住